

# おしこしんや なべしまなおさと 鴛河申也と鍋島直郷の文事

## 祐徳稲荷神社中川文庫蔵『凶草』<sup>しこくさ</sup> 翻刻と解題（1）

進藤 康子

### 要約

江戸時代中期の地下歌人の鴛河申也は、佐賀鹿島藩第六代藩主鍋島直郷の和歌の師である。

申也は、風絃堂（長英、長教、長賢）と称し、享保期の江戸歌壇においては、ある程度名の通った師匠であった。

申也を取り巻く当時の江戸歌壇を新たな視野に見据え、今まであまり知られていない申也の活動の糸口を探り、鍋島直郷の文事を解明するための一端として、今回は、鴛河申也の家集『凶草』（祐徳稲荷神社中川文庫蔵）を、新資料として翻刻、紹介し、申也の和歌とその世界を辿っていく。

キーワード… 鴛河申也（長賢、風絃堂）、鍋島直郷、凶草、江戸歌壇、

望月長孝（長好）、広沢流

### 一、はじめに

江戸時代中期の地下歌人<sup>じげ</sup>鴛河申也<sup>おしこしんや</sup>は、その晩年に、佐賀鹿島藩第六代藩主鍋島直郷<sup>なべしまなおさと</sup>の和歌の師となった。申也は、風絃堂（長英、長教、長賢）と称し、享保期の江戸歌壇においては、ある程度名の通った師匠であった。

垂加流神道の井田道祐門下の村田春道（春海の父）も、歌を、初めは申也に学んでおり、後に賀茂真淵門下となった。

祐徳稲荷神社中川文庫蔵（以下中川文庫蔵）の『四十賀之記』（正徳五）には、申也の四十歳の賀に、五十数名の和歌と漢詩が寄せられている。『一人三首和歌』（中川文庫蔵）には、申也を含め六十一人の和歌が収載され、その他『にこ草』『享保丑年仲櫓望之記』『甲寅記行』（いずれも中川文庫蔵）などには、申也と交流のある儒者の梁田蛻巖や豊臣為重、大江直陳、萬庵和尚も見える。

また、特に注視されるのは『中院前内府通茂公口伝』（中川文庫蔵）の表紙裏に書かれた直郷自筆の歌道の宗匠系図である。そこには、次のように、

幽斎―貞徳―長孝―祐庵―申也

と歌道の道統図を示し筆録した。細川幽斎から松永貞徳の流れを汲む広沢流の望月長孝に注目したい。何故なら祖父鍋島直條<sup>なべえだ</sup>の和歌の師はこの望月長孝で、直郷自身も、実は、長孝門下の、富松祐庵弟子の鴛河申也から教えを受けたことを示す図だからである。

申也を取り巻く当時の江戸歌壇を新たな視野に見据え、今まであまり知られていない申也の文事とその活動の糸口を探り、引いては鍋島直郷の文事の一端を解明するために、今回は、新資料である

鴛河申也家集『凶草』の「春」部からの翻刻を紹介し、申也の和歌の世界を丹念に辿っていかうと思う。

## 二、鴛河申也と鍋島直郷

鴛河申也については、先学に、井上敏幸氏「鴛河申也と鍋島直郷」『新日本古典文学大系 月報68』（岩波書店、一九九六年）などがあり、それらに導かれ整理しまとめていく。

姓は鴛河（『和学者総覧』）、鴛氷（『擁書漫筆』）、推江（『鹿門隨筆』）、押小路（『渚の松』）となっており、姓は全く一致していないといって良い。名は長賢（『泊泊筆話』）、長教（『擁書漫筆』）。号は風絃、風絃斎。堂号は風絃堂。生まれは京都で、江戸在住の人。学統は広沢流の広沢長孝（望月長好）とある。

また、中川文庫蔵書の申也の遺稿群の翻刻集である、井上敏幸・進藤康子「鴛河申也歌稿集」（『鹿島鍋島藩の政治と文化』所収。国文学研究資料館研究成果報告、二〇〇八年）に於いては、申也若き日の歌集『にこ草』奥書の「望月長孝門弟富松是祐弟子 鴛河長英」から長英を名乗っていたことや、『享保丑歳仲槐之記』では風絃、風絃堂と記していること、『四十賀之記』では、申也先生、鴛河先生と称されていることなどを具体的に示してきた。

医師であり、また「真淵県主よりも先輩にて」、「歌に名あり」（『擁書漫筆』）、「教えを受くる人多」（『泊泊筆話』）く、「申也は能書なり」（『渚の松』）とあることなどからも、申也は、享保期の江戸歌壇において、ある程度、名の知られた和歌の宗匠であり多くの門人を持ち、能書家であったことなどが浮かび上がってくる。

この宗匠の最晩年の門人が肥前鹿島藩第六代藩主鍋島直郷（享保三年生まれ、明和七年歿）であった。直郷の生涯を記した『直郷公

御年譜』（以下『御年譜』中川文庫蔵）の記載の元文二年の条を見ると、

元文二年三月朔日、鴛河申也を始めて召し呼る  
その後比々として来り、歌書の講談を聞玉ふ  
尤添削を聞玉ふ

とあり、直郷が申也をはじめて江戸藩邸に召した日付「元文二年三月朔日」がわかり、さらに、特に「和歌添削」を申也に希望し、頻繁に講義を受けていたことが記載されている。

また次に、元文三年の条から申也の生没年を推定すると、

元文三年六月二十八日、申也より百人一首の伝を受け玉ふ  
七月二十四日、鴛河申也病て死す

との記事がある。元文三年（一七三八）六月に「百人一首」の伝授を申也から受けながら、なんとその約一月足らずの後の、七月二十四日に申也は没していることが確認できる。そして次に、申也の『四十賀之記』（中川文庫蔵）を精査すると、この歌集は、申也および、申也門下六十余名の詩歌和文の稿本であるのだが、申也の四十の賀が催されたのは正徳五年（一七一五）。申也生誕の日、二月二十九日である。よって、申也の生まれたのは、宝永四年（二六七六）二月二十九日ということが、明らかにになった。

従って、申也は六十三歳没ということが新たに確定した。井上氏は、「鴛河申也と鍋島直郷」に於いて、没年を五十三歳とされていたが、申也没年は六十三歳となることを、ここで新たに更新する。

さて、再び『御年譜』の「元文三年七月二十四日 鴛河申也病て死

す」の記述の続きに話を戻すと、次のようにある。

申也存生のうちに、古今・源氏・伊勢物語の約あり。因って、伝書は公へ奉るべし。しからばその子新次郎へ、毎歳三人扶持給はらんと、叔父西岡一斎へ井田道祐をして説かしめられしかば、歌道の遺書悉く公へ献じぬ。

申也の遺書を悉く買い取り、申也の息子の新次郎へ毎年三人扶持を与えるなど、直郷の申也から受けた恩恵の深さへの感謝と、申也への傾倒ぶりを改めて知ることができる。これを以って、中川文庫に申也の貴重な遺稿群がまとまって入った所以である。直郷は、申也と出会い、和歌の添削や講義も集中的に受け、短い期間の指導であつたが、その申也の感化の大きさは、いかほどであつたことか。更にまたそれを裏付ける直郷の和歌がある。

頼むぞよ 憂身ながらも 家の風 ことばの花と かほるをしへ  
を『まきののかずら薛荔』中川文庫蔵)

この歌は、直郷が申也に対して「頼むぞよ」と切実な気持ちを出している。二十歳の青年の、これから歌道を学ぼうとする真摯な心を表出したものである。これに呼応して、

なみならぬ 和歌の浦鶴 鳴くばかり 心をよせし 玉藻とぞ  
みる

と申也は答えている。これは、広沢流の道統への志を汲み取り、直郷の祖父鍋島直條が、かつて望月長孝の門人であり、直條の学問を

「家の学問」として直郷は守り抜く覚悟があることを受け取ったものと言えよう。

直郷の歌道の道統図に關しての資料『中院前内府通茂公口伝』の表紙裏に書かれた直郷自筆の歌道系図のメモ「幽斎―貞徳―長孝―祐庵―申也」があることをはじめに触れたが、これも歌道の流れを自分で書き示すことによって、直郷は、敷島の道への強い志を著わすことになったと思われる。また『御年譜』の元文二年の条に、

申也は京人也。風絃堂長賢と称す。其氏は富松祐庵「生翁と称す」祐庵はこれを望月長孝に受く。長孝は松永貞徳「長頭丸」の弟子。貞徳は細川幽斎「玄旨法印」の門人なり。そのかみ長孝京師の広沢に居す。因て長賢自ら広沢流と称す。

とあり、広沢流と申也が称する所以や、申也の直接の師祐庵の名も詳しく見い出せ、『中院前内府通茂公口伝』表紙裏の直郷歌道の道統図とほぼ一致する。

『岐蘇紀行』(中川文庫蔵)に「広沢流長臥(直郷)」と直郷は記しており、更に、「風絃堂門弟随一長臥(直郷)」と筆録し、自ら申也の歌の継承者「門弟随一」として自負している。しかも、直郷は、申也亡きあと、師の申也を「先師風絃堂長賢翁」と称し、自分を「風窓堂直郷」と名乗ることにより、よりその後継者意識を堅固なものとしたと思われる。そしてこれよりは、直郷は、自らが師となって歌道の指導や伝授を家臣らに行っていくのであつた。

今回は、中川文庫蔵の申也遺稿群の中から、申也の『凶草』の「春」の部から翻刻し、直郷の文事を支えた駕河申也の和歌の世界を見ていきたいと思う。

### 三、『凶草』翻刻と解題

『凶草』は、四冊本から成る写本で、鴛河申也自筆稿本であり、享保頃の申也の和歌・随筆・序文などをまとめたものである。

『凶草』（一）は、「春」「夏」「秋」「冬」合わせて二千二百八十九首。「春」の部の六百八十一首のうち、紙幅の都合上にて今回は、三五七首の翻刻を載せる。書誌は次の通りである。

#### 書誌

祐徳稻荷神社 中川文庫 ラベル番号(62121276)

作者 鴛河申也 自筆

内容 享保頃の和歌・序文など

写本 縦二十三・六センチ 横十七センチ

一面行数十二行・一丁に付き和歌二十四首

#### 四冊

一	「凶草」(和歌部)	春	二十九丁
		夏	二十三丁
		秋	二十五丁
		冬	二十三丁
二	「凶草」(和文部)	離別	六丁
		哀傷	十四丁
三	「凶草」(和歌部)	恋	十六丁
		雑	十六丁
四	「小序 辞」(和文)	小序	十九丁
		辞	四十三丁

### 翻刻凡例

- 一、本文は原本通りを旨とした。
- 一、行移りは、原本に従い、表裏をオ・ウとし、また、丁移りの箇所は、「1・オ」、「1・ウ」の如く記号で示した。
- 一、清濁は原本のままとした。
- 一、和歌には、歌番号を付した。
- 一、虫損により、判読できかねる箇所等は□□で示した。

#### 翻刻

### 凶草

#### 春夏秋冬

#### 春の部

- 1 試筆 春の日の光を花の鏡とも見れはくもらぬ千代の岩水
- 2 浦帰雁 あかしかた月のうつろふ雁金のかけさへつれてかへる浦浪
- 3 六寺花 ふるてらの霧にゆつりしけふりをも春あらたむる花の匂ひか
- 4 試筆 けふといへはとくる氷の水茎に千代の数／＼花のはつ
- 5 春夢 あけは又花にむかはん心より絶えていとはぬ夢のうきはし
- 6 試筆 あら玉の光はわきてほの／＼と霞にしるきはるの山々
- 7 岡春草 忍ひえぬおもひや色にをし出るたかかた恋のをかの

- はるくさ
- 8 試筆 一とせをたとる心もけふよりや又あら玉の春そきにける
- 9 静見花 春風もとせぬ花のしら浪のかゝるを見るそ物おもひなき「1・オ
- 10 梅薫袖 身をかふるおもひよ梅の香をしめし袖の追風人なとかめそ
- 11 落花 よしやちれこゝにうき世の風なれば花なき里に色もみすらし
- 12 鶯為万春友 鶯も万世かけてさそふらし人の心のはなをしるへに
- 13 子日松 一夜百首中 初春の初ねのけふに引まづは千世を手にとる心ならしな
- 14 遅日 右同 数／＼の文も見はてむ春の日や宮の螢の光からすて
- 15 載花 右同 花心花にはありと我は此のうへしきくらの色にひかれし
- 16 插花 右同 けふ桜咲つる陰にやすらへはおらても花のかさしならまし
- 17 絲桜 右同 春風にちらてみたるゝ絲桜花のよしきをおるところみな
- 18 雉子 右同 狩人のきかは夕なのきしならむ名のるはかりは音にたつなゆめ
- 19 杜若 右同 一もとは手折やせましかきつはたゆるさぬ色に花はさくとも
- 20 嶋歌冬右同 世をうさの小嶋か崎にさきぬれと色はにきはふ山吹の花
- 21 梅風 駒つなくかすかにちりし花は猶風にしるへのやとのむめ□□「1・ウ
- 22 海辺初霞 朝日かけうつるかすみはくれなゐのにしきにつなくすまの友舟
- 23 春祝 玉の枝もせき日影にあえならんさむさぬるさをしらぬ春へは
- 24 試筆 さらにわかことはの林分入也情の始のはしめなるらむ
- 25 花下忘帰 見る花のこの下露にぬるゝ袖くつれとをのゝえこそかへらね
- 26 浦春月 おほよとの松にをとする風のつてにかすむうらみもはるの夜の月
- 27 朝霞 朝日影にほへる山はたか為にかすみの衣よそひそふらむ
- 28 試筆 心あらてほゝえむはかりさく梅も春のはしめのさかへとそ見る
- 29 春夜 春なからかほらぬ梅の花とみんこすゑにうつるほしの光は
- 30 依風春梅 目に見えぬ風のよすかに我そしるうつしえかたき梅のかほりを
- 31 六寺花 西になる日影もけふはわすられぬとよらの寺の花のなかに
- 32 連峯霞 うつしとるたか華かきの□ならんみねよりをちもみねの霞は
- 33 松上嵐 時雨にはつれなき松も春めきてかすみそめにしいろそことなる「2・オ
- 34 梅薫袖 山人の袖まへ匂ふ春風にとはねとしるしむめのさ

- かりは  
3 5 春風解氷 氷あし汀の舟も春風にをのれといつる志賀のう  
らなみ  
3 6 春宮 咲くちる花はなかめの秋もありめくれる春のゆきの  
ひとゝき  
3 7 落梅浮水 池水にけふも中／＼うくひすのおもひやつける  
きさらきの雪  
3 8 鶯山春望 春の日はかすむかたよりくれそめてみねにほの  
めく三日月の影  
3 9 江春雨 ふく風もなこの入江のあしくゝのひとへにさひし  
春雨のそら  
4 0 庭花 たよりなきところになとてまよふらんさくらはやと  
の庭にこそ見め  
4 1 山風春雨 梅ちらすかた山かけの下庵はふる雨たにも花の  
香そする  
4 2 名所花 花を雪と見しいにしへをしたふより（しのふるそ）  
雪も花なるみよしのゝ山  
4 3 晩鶯入霞 くるゝ日は嵐の袖につゝめともにほひもりくる  
うくひすの声  
4 4 海路朝霞 うなはらや今朝は霞の中／＼にかたほにみやる  
舟そえならぬ  
4 5 雨中春庭 かつちれと庭に残れる梅かゝやふきてとゝめし  
春雨の□□「2・ウ  
4 6 望山待花 立むかふ色に心やうこくらむ花は名のみ山の  
し□□も  
4 7 遠山春月 遠かたの残る雪かと見るうちにくるれはしるき  
みねの月かけ  
4 8 花下送日 世のうさをわすれよとてのほたしなる日数ふる  
のゝ花のなかめは  
4 9 寄花祝 春ことにこかねの鈴をうけそへてふるよきかふる  
花の下かけ  
5 0 市花 立さはく此木の下中市人よいかにかふへきはなのや  
はらき  
5 1 尋花 ゆふへには立まよふともゆきなまし朝に花の道を聞  
はや  
5 2 鶯春花 をくれよといさめ置つゝ春やゆく日も入あやの花  
の色香は  
5 3 春来 霞む日は花のかたへのみやま木のわかれぬ色に匂ふ  
春風  
5 4 試筆 としといひておしむおもひもあら玉の人のこゝろの  
花の初春  
5 5 梅花久薰 雪のうちにさきにし花の一ときを二とせかほる  
春の梅かえ  
5 6 霞帰行舟 行舟を浪のいつこと見くまのや海より庭に霞わ  
たりて  
5 7 春曉月 あはれしる人のむかしをおもひねの夢ものこれる  
春の夜の月「3・オ  
5 8 帰雁 みし秋のわさたかりかね帰なりうふる初なへまつこ  
ともなく  
5 9 春舟 吹風に磯山桜たそゆきて花をもひける沖のあみ舟  
6 0 花潜残 捨かたきすかたを花の心にもおしむいろとやちり  
のこるらん  
6 1 花残待人 とふ人をまつとやすまのあま衣残れる花はまと  
をなからに



62 心在山花 おられねは絵にかく山の花と見て心を色にうつしそめぬる

63 落花入簾 散花をさそへる風のよすかには塵もいとはぬこのうち哉

64 春猷 たとりくるかすみのおくの我やとにぬししる犬はとかむともなき

65 春野 今も猶一夜ねぬへき春の野になとてふとりの立帰らしむ

66 試筆 物ことにあらたまれともふるる世をしたふくとはのはなの初春

67 なへてよのさかしをろかしことの葉の種とりそめん春はきにけり

68 梅有遅速 鶯のねくらいつれとさたむらんおしむを待もおなし梅のえ

69 しら雪のそのふるとしの匂ひよりけふたく梅や春の初はな  
「3・ウ

70 鶯声帰竹 くれ竹の葉山の奥に梅やさくにほひこもれるうくひすの声

71 竹間鶯 あたにさく梅はひとへにうしとてやいく世の竹にきゐる鶯

72 竹鶯 見えまかふをのか羽色のくれ竹に千世の聲そふはるのうくひす

73 折蕨 うなひ子か折手にまかふ紫のゆかりの露の野へのさわらひ

74 残雪 春なれやつくしのわたの俤にのこれる雪も□□□□□

75 鶯是万春友 万世もつきせぬ鳥のあとゝめし道にとゝなふ

やとのうくひす(鶯の聲)

76 浦春月 春の夜やみしかきあしのふしのまに浦浪かけてしらむ月かけ

77 落梅香 さそひくる風のよすかにみかくれて花のかゝみは香こそくもらね

78 春風にかほれる塵はかけてしもいとはぬ花の鏡なるゝらし

79 款冬 とふ人も八十氏川に□け見えて賑ふ色の山ふきのはな

80 林下春雨 みやき野のふるとしわかぬ春雨に恵みて増る木々の下露

81 遠近帰雁 かりかねの聞ゆるそらも聞えこぬ雲ゐにかすむはるのかよひち 「4・オ

82 をのか音の聞ゆるそらに聞えこぬ雲ゐはかすむかりの一つら

83 越山見花 風かほるよすかに入し山郷を山にこころの花にわすれつ

84 志賀の山こえ行末にかけてけりひしの高根の花の白ふゆ

85 湖上花 志賀の海や風もなきたる春の日にうつせは花の浪そ立ける

86 逢樵夫問花 山人にとふこそ道の便なれ花をそふとてまふこゝろは

87 花時鞍高多 打むれてたゝによりこし花のもとかへらは駒のつな引やせん

88 惜花 今朝は又残りすくなき花ふさにたゆからておる手もよはり行

89 落花不終空蟬樹 今はともいはてうつろふ花のえにうき春風や□□そふらん

90 鶯春花 おしめ猶残る日かけは玉くしけふたゝひ花もえたにかへらす

91 おしめともいつしか春はたけくまの松にたくへて残る日数を

92 試筆 山とりのおのへの霞なひく也長／＼し日のはしめなるらん

93 初春□雪ふりければ 尽としのしるしより先目もはるに花のさかへは（を）しら雪のそら「4・ウ

94 鶯□□音 百とせの春とやきなく聲にしも千世は経ぬへきやとの鶯

95 春生人意中 ほのかなる霞も人の心よりはるといふ名の雲にたつらし

96 若木桜 をのつから花のかさしと立よれば老も荒木のむめの下かぜ

97 梅花薰砌 春風のさそふよすかに池浪の花さへ匂ふのきのむめかな

98 春雨 またれつる心なからものつけしな花はまたしき□□

99 野草緑 萌いつる草葉の色はかすかのに今いくかありて品／＼にみむ

100 栽梅待鶯 鶯にあつらへ告る風もかななれゆへうふる梅のにほひを

101 北洗寒留雁 こゝに猶やすらふ雁はさえかへるそらに越路の雪やしるらむ

102 幽栖春月 薄にもさはらぬ月の下庵にしくものもなき春の夜のそら

103 翫新成桜花 雨露のめくみにもれし桜にも人のこゝろの

花は見えけり

104 折蕨過友 けふはわかさそいてきつる友人のうらむるさきのわらひつむなり

105 暮山春雨 入相の聲はもりくる山端の家にこめしは春雨のそら「5・オ

106 水郷春曙 大ひえに残れる月もかけうすく霞からのあけほのゝそら

107 暮山春雨 飛ぶとりのかへる山路に聲はしてとせぬ春のなかめさひしき

108 霞端行舟 こく舟もよそにへたてゝみくまのゝはまゆふはかりかすむゆふくれ

109 釣舟の行えやいつこあま衣まとをにかすむ春のゆふへは

110 春松契千年 引うふる子の日の松に契をかんこすえも霞む千世の行えを

111 二月雪落衣 散梅の花のかほりも一時はきえあへぬ雪を袖にしめなん

112 花残前年 露のはへは中／＼わかぬ心哉こそもしも花にまとひて

113 池上落花 散花をとめぬなかれはうき浪にあはれのこれるや□の池水

114 終日対花 くるゝ程も見そめしけさの心さしてむかふにあかぬ花の下陰

115 夕花 入日さす峯のかすみもくれなゐににほひあひたる花の夕はへ

116 松下躑躅 山松のしけき梢はくれなから入日をかへす下つゝしかな

117 橋口花 たえ／＼に峯のかけはしかくろへて桜をわたる



## 春の山人「5・ウ

1 1 8 山花 おそに見て帰る袖にもかゝらなかつらき山の花  
のしらくも

1 1 9 故郷花 心しること葉の花の名残哉ならのみやこにほ  
ふ桜は

1 2 0 春舟 散うかふ波にまに／＼見えまかふ花にこかるゝう  
さの柴舟

1 2 1 しはしとやみきはの桜ちる比は錦につなく磯のさゝ舟

1 2 2 霞流春光 さほ姫の嵐のころもたちそめて遠山まゆそさ  
らに匂へる

1 2 3 嶺樹帯霞 春といへはまたるゝ花のよすかとやみねのこ  
すゑに霞たなひく

1 2 4 多年雪梅 いく春かあかすも梅の花にめてやとかる鳥の  
うらやまるらむ

1 2 5 いくとせかむかふにあかぬ梅の花また色にそみ香にめつ  
るころ

1 2 6 藤花久薫 春日の光をそへて匂ふらん玉の緒長きやとの  
藤かえ

1 2 7 避齡翫鶯 鶯になれこし春もあらたまのけふよりさそふ  
千世の初聲

1 2 8 河春月 霞立ころはかゝりのかけたえて月にいさよふう  
さのあしろ木

1 2 9 嶺樹帯霞 春といへはまたるゝ花に先たちてこすゑに匂  
ふみねの霞か「6・オ

1 3 0 早春雪 春きてはまとふおもひも便ある心の花よ木々の  
しらゆき

1 3 1 若菜 あら玉の春は雪けにみかくれの沢辺のわかなつき

## てやは見む

1 3 2 遙見春駒 目もはるにもゆる草葉は見えわけて霞にあさ  
るのへの春こま

1 3 3 梅風 尋きて梅のかほりにえたるかな霞なかるゝ風のよ  
すかに

1 3 4 残雪 さかぬまは色まかふ雪になくさめつきゆるも(は)  
花のよすかなからに

1 3 5 梅花盛久 此のやとの花そむかしの香に匂ふさかへ久し  
き人にたくへて

1 3 6 春ことの梅のさかへのたくへみんあまきる雪のつもるよ  
はひも

1 3 7 棧路春雨 山人のやすらふ花のかけやいつみねのかけは  
し□□の□□

1 3 8 百代春雨 行末の秋のたのみもしられけり雨にみちぬる  
苗代の水

1 3 9 雲雀遊霞 タひはりなれも霞をあはれとや芝生を出て空  
にしたへる

1 4 0 松契多春 いつとなき春の光のやとながら猶しも契れ千  
世の松かえ

1 4 1 垂柳落水 池水の汀の柳枝たれてさらにみとりのなみそ  
立そふ「6・ウ

1 4 2 谷川の峯の青柳ふしなひきわたらん人もぬれぬはかりに

1 4 3 風前帰雁 吹風のよすかあればそしられける雲路にかへ  
るかりのなく音を

1 4 4 帰雁風のまに／＼行ひとはをくるゝ友をいかにまつへき  
1 4 5 猶待花 咲比をとひあはすへき心より花まつとは友そ  
またるゝ

146 こてふたにいつとしらせよなれもさそ待らん花の咲そむ  
る□□

147 夜梅 香には猶しく物もなき春の夜や梅もおほろの月に  
たくへて

148 目に見えぬ花に心をさらへぬる梅かほる夜の風のよすか  
に

149 曉更春月 見しほとも夢斗なる春の夜やまたれし月是有  
明のそら

150 清風尋花 匂ひくる風のよすかに行袖はまたみぬ花の香  
をそしめつる

151 依花日短 尋きて見る色か□の春の日とおもへはあかぬ  
はなの下かけ

152 曲水宴 くむ人のかほのにほひもくれなゐの花をうつせ  
る波のさかつき

153 花有歛色 千世経つる道もまかはし咲花のひかりさへそ  
ふやとの梢に「7・オ

154 後会契花時 めくりくる春ことに猶わするなよ花の雲ゐ  
かみねにあひみむ

155 ともに今あかすはるより山の名の後せも花のおりとたの  
まん

156 岳花 世の人も花にな□□の夢なれやうきたつ雲の□  
まとひに

157 袖はへて雲にゆきゝの岡のへやたちぬいぬきぬも花にそ  
むらん

158 尋花 一すちに尋待身はみぬ色の花にさへ世の物おもひ  
もなし

159 雨中花 待ほとにまたれし雨のけふふれは恵みに花のち

らすやあらなん

160 閑居花 なれぬれはとふもうるさきやとなからとはすは  
花のつくしとやせむ

161 山家花 よのうきめみぬやとへは咲匂ふ花そかへさの  
ほたしなりけむ

162 松間花 十かへりの松のゆくえもけふこゝに捺さしかは  
す花に見せつる

163 十かへりの松のゆくえもけふはまつ捺さしかはす花にし  
られて

164 苔上落花 いく世へし苔の緑もちりくれはあたる花の  
色にちりぬる

165 滝上落花 つたへくる瀧の一音響になかれえぬ花も声あ  
る峯の藤かえ「7・ウ

166 藤 咲匂ふ色にこゝろもまつはれてかへるさしらぬやと  
の藤かえ

167 雨中藤 しら露の玉のせかけて光そふ藤は雨にそ見るへ  
かりける

168 試筆 をのつから霞に匂ふ山まゆのおもしろき世の春は  
きにけり

169 毎山有春 雪の岡に霞たな引いとはやも(め)山陰ことの  
花になるそら

170 松迎春新 わかさりしこそその梢の雪解て緑にかへる春の  
まつかえ

171 梅更松芳 枝かはす松もにほはゝ散うせぬためしになら  
へむめの初はな

172 春風解氷 とけそめて氷の隙にかけうつる袖のいろさへ  
花のはるかせ

- 173 遠山霞薄 けふはまた霞かくまもあさ日影さすかに見す  
るをちの山のは
- 174 朝霞 朝日さす光も花の春の山おほふかすみのそてもゆ  
たかに
- 175 歎冬 庭もせにこかねの色はみちのくやこゝもをた口山  
吹の花
- 176 梅風 うしとのみおもはし□よ(を)梅かえの花さそふよ  
りかほる春かせ
- 177 名所梅 よそまでも風のよすかや頼むらん月のかつらの  
さとの梅かせ」8・オ
- 178 峯残雪 つれなさも花まつほとなくさめや有明山のみ  
ねのしたゆき
- 179 春の色のをそきをいちふしら雪も残れはみねの花をこそ  
みれ
- 180 晴失帰雁 世は春の光のとけき大そらにしつ心なくかり  
のゆくらん
- 181 深夜春月 ふかき夜のあはれは猶も落たへに梅さへ匂ふ  
春の月かけ
- 182 夕雲雀 聲のみはそれとしられて雲をよふゆふ日とも  
にひはり落くる
- 183 林下春雨 春雨にぬれつゝまたんさかぬまのたのむかけ  
なき花のはやしは
- 184 人しれぬみ山はやしの下草もめくみはかくる春さめのそ  
ら
- 185 ことの葉のはやしかくれしこのものはるのなかめに花  
を待比
- 186 雲垣帰雁 猶さゆるこしちの春をたとりてや立そふ雲の
- 衣かりかね
- 187 潤梅落 谷風の(に)さそへる梅の下水にきえぬ雪ふるき  
さらきのそら
- 188 さえかへりとする氷のひまとみん谷風さそふ梅の下水
- 189 里人のときあらひきぬかほるらし梅ちのかゝる谷川の水」  
8・ウ
- 190 湖上霞 をとめ子か袖とやみましよこの海に霞の衣にほ  
ふあしたは
- 191 苗代 今よりやしての田長をよふとりの聲まちかほの春  
の苗代
- 192 花漸盛 明日も猶とへとや花の哀てふことをあまたにさ  
きもつくさぬ
- 193 野遊 うくひすもねくらにかへる夕暮れに家路にわす  
るゝ野への月かけ
- 194 萌草 行末はたか秋風にたらむらんあたの大野の葛の下  
もえ
- 195 湖上夕花 志賀の浦や霞もにほふ夕くれは沖までつゝく  
花のしらなみ
- 196 水郷 今宵しも行む袖や匂ふらん花待えたる宇治のはし  
ひめ
- 197 依花遠行 今もうきあらしや吹とおもふより千里をゆく  
も花の一とき
- 198 水郷花 たをやめの袖とみなせの川浪にこゝろうこかす  
花のおもかけ
- 199 みなせ川かすめる花の俤をゝとに出てはいかにいまし
- 200 花漸盛 散ほとのをそきおもひをなくさめやあかぬはか  
りの花の盛も

201 桃 たへかねておもひの色に出ぬらしものいはぬ花も風  
にたよりに「9・オ

202 花下送日 花の渚もせになるまでとあすか川きのふもけ  
ふもなかくめくらしつ

203 花雪 枝にこそつもるをも見ぬ庭もせにふりなまかへそ  
花のしらゆき

204 霞中花 おもかけは霞の袖にしのお山たれしのへとやか  
よふ花の香

205 生駒山花のはやしを立かくす霞も雲のころとやみむ  
206 雨後花 夕日影匂ひくるまで雨ははやはれても残る花の  
しらくも

207 試筆 埋木の人しれぬ身も花とめて鳥をうらやむ春はき  
にけり

208 寒梅始開 もろこしの名におふ嶺はたよりなしたゝ此や  
との梅の初花

209 春鳥呼客 鶯のなきていさなふたよりあれや花に成ゆく  
人のこゝろは

210 霞添山色 雪は猶残るひかりのさえもせすくもるやゝす  
む遠の山のは

211 雲とみん心のいろも花山のゆくえをこめて霞むあけほの  
212 松上霞 吹風も枝をならさぬ俤やかすみこめたるまつ  
の

213 霞隙行舟 磯辺こく舟さへよそにみくまのゝ浦浪かけて  
かすむ夕は「9・ウ

214 谷花 春ふかき露のめくみはよそならて谷にも花のひかり  
見すらし

215 雨中梅 うくひすも散をおしまは雨のいとにぬひとゝめ

てよむめの花かさ

216 残雪 春くれは霞なからのかひかねの雪にさやけさや  
の中山

217 つきてみん花さくまでは雪も猶つれなくのこれ有明のや  
ま

218 歎冬 詩人のいふにもまさる色香とて我もいはてややま  
ふきの花

219 雪中鶯 さえかへる雪にもあへようくひすのをのかぬふ  
てふ笠やとりして

220 積雪と名にたつそらはをのれのみまたうちとけぬ鶯の声  
221 梅柳更枝 風吹はかたへの梅にまついれてにほひくはゝ  
る青柳のいと

222 尋花留山 見ては猶山にすむ身となりなまし尋ぬるほと  
も家路わすれつ

223 たよりなき山路の露をかたしきぬ春の日くらし花をそふ  
とて

224 二月雪落衣 鶯のなけとも雪とちる梅の袖にとまるやき  
さらきのそら

225 風前帰雁 雁の行そなたよりふけ春の風たゝよふほとた  
にもみむ「10・オ

226 柳落 さしくしのあかつき露をかけてたかねくたれかみ  
かなひくあをやき

227 鶯 ちかねとはおもはし物を笛のねにかつまかへたる鶯  
の声

228 夕鶯 ふく風にねくらの梅も香をそふや日も入あやのう  
くひすの声

229 花半開 猶またんさきそめしよりけふまでのほとは経ぬ

へき花の盛を

2 3 0 花初開 雲とみしよしのゝ山も此やともけふめてそむる  
花はかはらて

2 3 1 夕花 かほりくる風のよすかにたくれもまよはぬ雲か花  
のひとむら

2 3 2 えたのまをひらきかはせし庭の面の花より外はたそかれ  
のそら

2 3 3 花初開 盛そとおもへはうつるならはしの世にさきそめ  
し花をこそみめ

2 3 4 雲とみしおもかけしたふ此やともけふめてそむる花はか  
はらて

2 3 5 物おもひなしてふ花のことの葉も千世のかさしの初さく  
らかな

2 3 6 松下躑躅 いはつゝしいはつてしたにもゆる哉つれなき  
松のかれやすらむか

2 3 7 くれて行高根の松の下つゝし花に入日の影をのこして  
2 3 8 杜着写水 紫の色こき野への杜着うつろふさはの水をわ  
かれて

2 3 9 松間花 松かえもおなじかさしと見るなへに千世もと頼  
むみよしのゝ花

2 4 0 春ことにうき世わすれてみよしのや松のあなたの花の隠  
家

2 4 1 夜花 かほりくる風に心をたくへてもめに見ぬ夜はの花  
の一むら

2 4 2 色は猶あくれとあけぬ夜はなれや草の戸さしの花のよこ  
雲

2 4 3 杜着写水 沼水も色にうつろふ杜着こひちにたてる花の

心に

2 4 4 松下躑躅 光つゝしおもひひかめやをのつから(かけたの  
むおもひの色や崗つゝし)松のけふりの下にもゆらむ

2 4 5 春枕 春雨にかけそふ露の下袖もうちとけて見る花の手  
枕

2 4 6 春風も音せぬ雨にそらたきのけふりもしめる袖の手まく  
ら

2 4 7 春舟 けふはたか心のかすみかゝれはや世をうき舟のこ  
かれゆくらん

2 4 8 あしたつのつはさ霞で遠き世もこひわたるらしわか海  
舟

2 4 9 春煙 よしの山行かふ風にふるさとのなひくけふりも花  
の香そする 「11・オ

2 5 0 春は猶霞をそへて賑ふや民のかまとにたてるけふりも  
2 5 1 簾外燕 つれてこし風ものとききこすの外に静心なくつ  
はめとひかふ

2 5 2 幽栖藤 とはれしとおもひすてにし宿とてやをとせて  
かゝる松の藤なみ

2 5 3 元日立春 なをき世をよそへて世はきにけらしひとの心  
もみつのはしめに

2 5 4 鶯又素音 是も又滞れる世の声ならしほゝえむ梅にきな  
くうくひす

2 5 5 松上霞 程となる人のこゝろのはる霞ほのめき初るまつ  
のことの葉

2 5 6 散うせぬ松のことの葉いとしほの立まされとや霞そふら  
ん

2 5 7 鶯是万春友 万世もつきぬこと葉の花になく心とともに

やとのうくひす

258 若菜 白雪に入ぬる磯をかきわけてみらくすくなき若菜  
をそつむ

259 依梅知春 梅かえの匂ひや春をしらすらのこれる雪に  
かせはまかへと

260 遠山霞 わたつうみの舟路のとけき朝なきに霞をかさす  
浜のしまやま

261 柳絲春 をのつかからかゝるめくみや春の色を露みせそめ  
し青柳のいと「11・ウ

262 依梅知春 さやかに花みぬやとも春きぬとおとろかれ  
ぬる梅の下かせ

263 春雪 けさはたか垣根の梅をとひぬらん駒のおとあるさ  
とのしらゆき

264 早春雪 春きては松にも花のおもかけにとよとしるく  
しら雪のそら

265 留船聞鶯 河そひの柳のいとも舟人の心やつなくうくひ  
すのこゑ

266 風揺白梅朶 かほりきて白きを後にみる梅は絵にうつし  
えぬかせのこゝろか

267 山路雉 行ゑたにそこしらぬ山路哉つまこふきしの  
声もかすみて

268 春曙 あはれさは秋のゆふへにかはれともかりかねさむ  
き春のあけほの

269 社頭梅 吹風にゆるし色なる梅からや紙のいかきもこえ  
できぬらん

270 庭春雨 家／＼の庭のをしへやおもふらんあはれ草木の  
かそいろの雨

271 春雨のふるき軒端をとほとへにわのよもきの露のこゝ  
ろを

272 社頭梅 神垣のちかひも雲にみちぬらん星の光にほふ  
梅かえ

273 竹鶯 鶯のこゑのひかりを色ふしになしてややとすそ  
のゝくれ竹「12・オ

274 苗代蛙 鳴かはつ忍ひもあへす妻やこふたねまくしめに  
□□てきこゆる

275 岡早蕨 紫の塵に立名をいかにせんしのふの岡にもゆる  
さわらひ

276 霞中梅 たか家のこすにほのめく袖なれや霞にもるゝ梅  
の色香は

277 移りくるかほりやしむとさほ姫の霞の袖につゝむうめか  
え

278 咲はなの立枝は見えず霞めともおもひの外に匂ふむめ  
かゝ

279 閑庭春夢 みつの道わけぬる跡はなき庭も春にとはれて  
もゆる若葉

280 橋辺帰雁 打わたしをくるゝ雁の一つらを見しはかすめ  
る嶺のかけはし

281 花処々 今日猶色につくはの小桜のかのもの花になる  
より(ママ)

282 遠尋花 咲花とあさむく雲を分ゆかん雲とあさむく花も  
ありやと

283 花下遇友 人もけふこすはとはかりおもひけん心あひた  
る花のしたかけ

284 残花薫風 をしへをく山のさくらやかほりきぬ外のちに



- し後の春風
- 285 故郷花 雪とみし心はいくよふるさとに匂ひとゝむるみ  
よしのゝ花」 12・ウ
- 286 暮春花 花の香の名こりを風にとめくれは山の奥にそ春  
はやすらふ
- 287 猶残る花のかたへは春と夏と行かふそらもかほりはかり  
に
- 288 物おもひなきならはしか惜むへき春の名こりも花にわす  
れて
- 289 月前折花 をのつからかつらもそへて折ねとや花をてら  
せし月の心か(は)
- 290 静対花 初瀬山花にむかへはうかりける心の風のふくと  
しもなし
- 291 山家花 なれぬれはなれしあらしの風も又このころつら  
き花の下庵
- 292 試筆 春なれや草の庵もしめみえて神代の民の心をそし  
る
- 293 元日子日 明そめしけふの子の日の玉はゝき手に入とし  
のひかりことなる
- 294 連峯朝霞 時しらぬふしにも春の色みえつあしからかみ  
ね霞むあさは
- 295 梅香留袖 袖に今なつかしき香をしめしより過こし梅の  
あはれさへそふ
- 296 春風初氷 氷ゐてくもりし池のかゝみをは吹とく風やみ  
かくなるらむ
- 297 梅薫枕 梅まところまはいかなる夢かむすはまし梅かゝさ  
そふ風の手まくら」 13・オ
- 298 春風にいつみの梅やさそひこしおもひほか(ママ)にかほ  
る手まくら
- 299 折蕨 むらさきの塵のよ出しから人のこゝろもわけてお  
れるさわらひ
- 300 柳靡風 吹風になひく霞のうすころもあへすはつるゝ糸  
やなきかな
- 301 揺見春駒 目もはるに糸もてつなく緑哉柳か□□にあさ  
る春駒
- 302 遠浦春曙 眺めやるあはれはいつれすまあかしをのかう  
ら／＼かすむあけほの
- 303 海上帰雁 からしともいさしら波の塩ち経て故郷おもふ  
春のかりかね
- 304 閑庭春草 踏分る人もあらしとよふよりははやおひたち  
ね庭の春草
- 305 薫春藤 さほ姫の名残の袖やまつはれし霞も匂ふ花のふ  
ちかえ
- 306 待花 なかめこそ猶たゝならぬ咲比もつれなき花はまた  
しともへと
- 307 凌霞尋花 霞こそ花を尋るたのみなれさきさかぬいろの  
あらはならねは
- 308 かほりくるたよりありともまとはまし行手もかすむ所は
- 309 花春友 友とみるこそやさしき老の身は花のおもはん  
ことをおもえて」 13・ウ
- 310 花方盛 かたふかぬなかはの秋の月なれやおもひくまな  
き花のひかりは
- 311 潤桜落 二月や散くる雪は消やうかふもかほる谷の  
下水

3 1 2 散りかゝる雪かと思へは此谷のひくきもうめの花はこたへて

3 1 3 独見花 友人のこぬもうらみしらはかく心もちらぬ花をみてしや

3 1 4 花隔月 はる雨に白き霞をこかしてや花にかくろふ月にたくへむ

3 1 5 雨後花 一とをり降こし雨の雲晴てみねに残れる花のむらくも

3 1 6 花埋谷 くちぬとも匂ひはのこせ散かゝる花をかさねし谷のむしろに

3 1 7 鞆中花 故郷の雲ははるかにへたつれとうしとはみねの花のしたくも

3 1 8 桜さくねこし山こしふく風に香をたにをくれふるさとのそら

3 1 9 色わかぬ花と見ながら故郷のこゝろを旅のそらにしらはや

3 2 0 水辺躑躅 わたるとも中は絶しなつた川うつすつゝしの花のにしきは

3 2 1 山家夕藤 夕くれの風にたゆたふ藤浪のをとさへまかふ松のした藤「14・オ

3 2 2 春獣 めつらしな名もしらぬ花になれ／＼て鹿のたゝすむ春の山辺は

3 2 3 歳暮立春 もとすゑのとしもよるなりあつき弓けふより春の立にひかれて

3 2 4 年内立春 白雪のふるとしかけて時しらぬ山も霞て春はきにけり

3 2 5 試筆 けふといへは春にうつろふ世の人の心の花を見ら

くのとけき

3 2 6 松上鶯 松かえにをのか上毛のみとりさへそへて春なる鶯のこゑ

3 2 7 遠山霞薄 さほ姫の霞の袖やぬれつらん遠山まゆにそふるにほひは

3 2 8 梅辺聞鶯 いつれとか品さたむへき梅かえの匂ひあひたるうくひすのこゑ

3 2 9 名所梅 うみわたる舟もたゆたふ難波江や梅かゝをくる風のよすかに

3 3 0 竹畔残雪 有明の月の心もしら雪のつれなく残る竹の下かけ

3 3 1 古寺鶯 人は猶春のこゝろもしら雪にはつせのてらのうくひすのこゑ

3 3 2 梅芳微雨 立よれとぬれぬはかりの春雨にうちしめりたる袖の梅か香

3 3 3 垣根子草 花にさかなんおひさきもかきねにこもる春のいろくさ「14・ウ

3 3 4 春月曙静 色に香に心をわかつてみつる哉花さかぬまに有明の月

3 3 5 雁列花 さく花をこしちの雪の色とたにまかいて帰る春のかりかね

3 3 6 春虫 あはれ也花なきさとも花のさく折しれとてやこてふ飛かふ

3 3 7 窓前梅 あつめえぬ心ならひにいさめをく雪となちりそまとの梅かえ

3 3 8 隔水見花 瀧津浪へたてし花は匂ひたにたもとにうつれ家つとにせん

3 3 9 月前折花 折袖にかつ／＼花もちりくるや桜にをける月の下つゆ

3 4 0 鶯春藤 鶯もしはしやすらへ暮て行春に匂へる散もある世哉

3 4 1 朝見花 夢の世に俤したふいにしへの人に見せはや花のしら雪

3 4 2 谷花 谷ふかみみねのあらしもよになれば物おもひなき花(谷)の霞か

3 4 3 春舟 うしとのみ見るへき物か川岸の花ちりかゝる舟の追かせ

3 4 4 試筆 かけ初る霞より先あはれてふことたつ春のやまところの葉

3 4 5 早春柳 松かえはをとせぬ春の初風になれのみなひくそのゝ春柳 「15・オ

3 4 6 鶯千春友 此やとに千世を契れることの葉やちりうせぬ松にきなく鶯

3 4 7 月前鶯 いとゝ猶しく物となき有明の月もにほへるうくひすのこゑ

3 4 8 霞中瀧 春は猶霞の衣かけそへて光をつゝめる布引のたき

3 4 9 庭梅契久 散といふことやわするゝ梅の花栄久しきやとのみきりは

3 5 0 霞流山色 春くれはさかしき峰もほの／＼と霞のうちに見えてのとけき

3 5 1 梅香薫簾 こすの隙氷の風もゆるさんさそふ軒端の梅のかほりに

3 5 2 薫くる風のよすかにこすまきてみれば雪にもまさる梅か

え

3 5 3 朝鶯 聞くはけき春の心にならしはの垣ほになれようくひすのこゑ

3 5 4 あさいする人は一日のをこたりをなれやいさめて(し)鶯のなく(こゑ)

3 5 5 栽花 うへをきて梢の色のまたるゝやさかん日までの物おもひの花

3 5 6 社頭花 花の香や神のいかきもたえぬらんみまほくほしてふ人の為とて

3 5 7 橋霞 遠かたの霞の袖のにほひより花やまつらん宇治のはし姫 「15・ウ

(次回につづく)